

復活

遠景



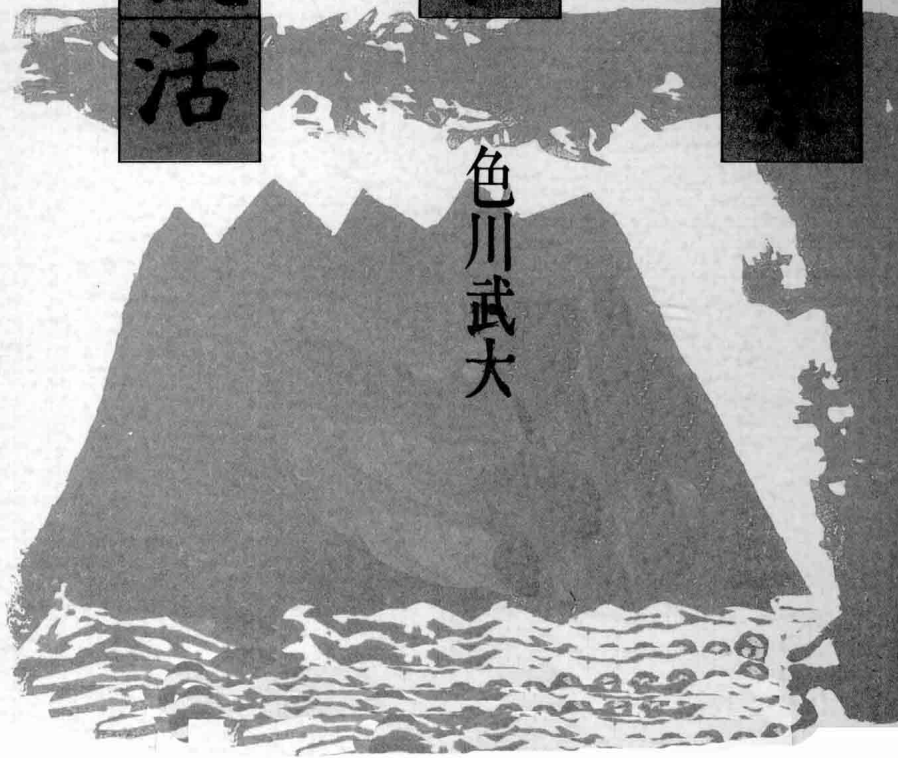
色川武大

雀

復活

卷

色川武大





色川武大（いろかわ・たけひろ）
一九二九年、東京に生まれる。東京
市立第三中学校中退。六一年、「黒
い布」で中央公論新人賞受賞。七七
年、「怪しい来客簿」で泉鏡花賞受
賞。七八年、「離婚」で第七九回直
木賞受賞。八二年、「百」で川端康
成文学賞を受賞。著書として他に
「穴」、「生家」、「花のさかりは地下
道で」、また阿佐田哲也筆名で「麻
雀放浪記」などがある。

遠景雀復活

一九八六年二月一〇日 第一刷印刷
一九八六年二月一五日 第一刷発行

定価二二〇〇円

著者 色川武大

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二一三二八

〒〇三 電話 〇三三〇一・二一三一

振替口座（東京）六一一〇五〇九七

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替へ致します）

遠景雀復活 目次

走る少年	虫喰仙次	陽は西へ	雀	観音	復活	遠景
211	167	129	107	81	49	7

装 装
丁 画
菊 秋
地 山
信
義 殿

遠景雀復活

遠
景

御年^{みとし}さんのことを記したいが、御年さんのことをよく知らない。

御年さんは私の父の一番末の弟である。十二人兄弟の長男と末の弟だから、二十近く年齢が離れている。彼等全体の父親、つまり私にとっての祖父が急死したとき、一番末の妹は三歳、御年さんは六歳だった。したがって残された大所帯が、ほぼ長男を中心にして秩序をたてた。最近、父の文箱にある古い手紙類を読む折りがあつたが、大勢の弟妹たちが或いは肅然として長男の威令にしたがい、或いは多少のさざ波をたてながら、とにかく交流しあつて生きている様子をかいまみることができた。

この家は祖父の代に破産し、その折りの借財の後始末もあり、加えて弟妹たちを一人前に仕立てあげねばならず、彼等の母親および長男の負担は大きかったことと察しられる。妹たちのつれあいに再婚者が多く、また長男の結婚が一番最後になっているなどの点にその色を見ることができ。妹たちの婚姻に際しての一々の心情を推しはかるすべもないが、しかしいづれも失着の色

なく、婚家で花を咲かせている。結婚前、結婚後に、それぞれ病を得て若死した妹二人、それに御年さんをのぞいて、弟たちもおおむね順調であった。

さて、自分が発信した手紙は手元に残るわけがないが、父の場合はちらほらとある。これは父が軍艦に乗りこんでいて、成育中の弟妹の居る生家に書き送っていたからである。ここに一二通ご紹介したい。いずれも若死した妹に書き送ったものだが、昔の人は、達筆、能筆だったと思う。電話ができて後、私どもは特に筆をとらなくなり、もはやこういう手紙は記せなくなった。

日ましにあたたかく相成り、昨日今日、御いたずきの身の、さぞやおつらき御事と推し候。遠くいだしりたる身の、心のみ遣わるることのうたてさよ。

いでや、日頃の情報書きつらねて、せめてお退屈のまぎらわしともなれとて。

——蓄音機おそばにありと承わり、近々レコードお送り申し候べく、——小生の選択いたせしもの、お気に召さなば、耳の加減怪しからん、耳鼻咽喉科にかかる必要になるか、呵々。

只今、豊後の国佐伯の沖に罷り在り、昨日は別府に参りしなん。艦隊は皆当方面に集合、日々豊後水道の中央に出て、南下しつつ射撃訓練に従事いたし居る。此方面は大正三年頃、小生、三等水雷艇艇長として哨戒勤務いたした海面にて、山も、岬も、旧知のなつかしみ有之候。八月十日頃までは当方面にていそがしきことにごさ候。我れ等年中の働く期節も、後十数日にて過ぎ去

るかと思えば、多少楽しみに有之、人間はやっばり楽はしたき者に候よ。

近頃殺風景なる月日のみ打ち続ける毎日なるべし。誰いうとなく、艦内に草花、植木など持ちこみ愛撫する者多く相成り候。桜草、セラニウム、さては名も知れぬ草花、松、竹、梅、朝顔まで培養いたし居り、朝な夕な、後甲板に打ち並べては、罪なき批評に花咲かせ申し居り候。實際の花はよくて三日、悪しくばその日のうちにしほみ果てる、多分、水の金気、塩気あるためなるべし。港々に入る度ごと、新しき鉢の増し申し候えども、片はしより水葬され終るは遺憾にて、小生も桜草を呉水交社に入院せしめ、チューリップは水葬、今は寿永かれと竹を愛育いたし居り候えども、枯れたるは残念に存じ居ります。

御なぐさみまでに本艦の乗員、御紹介申し候わんか。

司令官勇七君は、頬に戦傷の痕あざやかなる長大漢、東北のズーズー弁にて縁日の植木を値切り倒して携帯、ポックポックと帰艦遊ばさる。

先任参謀信次郎君は、華奢な男、おとなしいこと無類なれど、潜水艦乗りとしては、日本海軍中の錚々たる者、家庭にも真面目にご奉公さるるようなり。

後任参謀清英君は、日清戦争の勇士志摩大尉の孤児、艦中一の好男子、新婚早々にして夫人は東都にあり、だいぶおめでたきようなれども、なにせ青春鋭気盛んなり。本職の無線電信で揚げ足とられた場合のほか、鋭気颯爽。

戦隊機関長川上君は、温厚の長者、何もせずに、飯を喰らい、月給を貰い、しかして談す。

艦長元治氏は、禿頭第一番、肥大短軀、ヒツッコイのとお若いのが特色、佐賀の産、助平第一番也。

副長鉄君は、お坊ちゃんなり。江戸ッ子を以て自任し、江戸趣味を推奨す、歌舞伎にくわしけれども職掌柄のことは何も知らず、艦長にだいぶ剣つくを喰って、弱々しき胃腸カタルの身体をいよいよ萎縮させ、形容枯木のごとし。年末までもつかぬ。

砲術長忠ちゃんは今春、流行性風邪より胸を病み、健康なお復せず、仙台の産、斗酒顔にあらわれず、ときどき身体をこわしては、さらに養生大切と心がける、髭面第一なり。

航海長柳さんは好々の善人、ときどき洒落をいう、説明せられずば解し難し。航海室の艦副長の下にあつていじめられること一番也。

運用長政君は独身者、ひやめしなれば品行おさまらず、瘦身よく上陸す。埼玉の産、旅行好きが感服すべき一点なり。焼鳥みたいなご面相にて案外もてるが奇妙也。

機関長成二君は日本海軍著名の男色家、兼ねて女色も漁すること飯を喰うより大事の男なり、だだっ子にして喧嘩ばかりしたがる物騒者、筋肉張りて機械体操の名人也。

一番分隊長加藤君はいっこく者、伊予の産、新婚早々にして少々角のとれきたりたるとの評高し、丈低くして、疎髭満面の凹凸を埋む。二番分隊長は鹿児島島の産、芋焼酎を好む、二眉肥え西郷

のごとし、精力第一也。三番分隊長は先日新婚はやはや、大阪の産、突飛な大声を發するを以て名高し、家庭の道具なお揃わず、来てはいかぬと訪問謝絶を広告す、なるほど玄關払いより当世なり、感心す。新夫人に尚拝眉の折りを得ずも、先般、南京豆を艦に送らる、士官室にてとみに評判よくなる。

軍医長は夫人との交情密なるをもつてきこゆ。まったく閉口なり。夫人は美人なり。子供のないうちよし夫婦は、僕は閉口だ。呵々。

オヤ／＼、くだらぬことを永々と書きつゞり、時節柄、紙がむだか。

可愛い妹 富ウ公へ

もう一通、末妹にあてた手紙。これも長くて、かゆいところに手が届きすぎる文面がやや異様でもあるが、私の父は何事につけ、いったん手をつけると癡る男で、他の弟妹たちへも長い手紙が折りに触れていったと思う。しかし、諸事すべてを癡りとおすことはむろんできない。文中の交情は濃やかで、この点は飾りでなく、まったくそのままの気持であることは息子の私がよく承知している。多分、弟妹たちにとって信じるに足る兄であつたらう。だからといって問題がないわけではなく、父の内心を長く苦しめる件も出来た。そこところが、傍目には面白い。

廿一日附御状披見仕り候。実は、貴嬢御健康此頃損ぜられ居たるやに聞きおよびしま、左右に迷い居る儀に有之候。今回の御書面には、肝心の御健康状態については、例によつて一言半句の御報告もなく、甚だ其意を得ざる次第に存じ候。お記しなきは善からざる為かとも存じ候えども、おかくし相成るは宜しからずと存じ候。貴嬢は元来、卑屈の性質につき、御自省可有之。

金五拾円也、為替にて同封致し置きます。食費を大坪氏（姉婿）へ差しだしたる後は旅費に有之候。女の旅につき余分に持たせたる儀に有之候。貴下は子供にあらず、一人にて御帰京可有之。途中の心附、懷中物の要心は御承知の事と存じ候。万一事起り候節は、電報為替という便宜有之候条、心安く御旅行可有之。汽車は初旅また長途につき二等（中級車）で可被為、夜汽車なれば寝台（下段）を前以て御契約、昼なれば座席を前以て御契約可然と存じ候。いずれも三日前より売り出し申します。当日にては売切りのこと有之候。時間は成る可くば、朝其地発、晩当地着の昼間の急行がよろしからんと存じ候。荷物は切符を牛込駅まで買い、手荷物に御預け可相成、手廻り少なきが都合よろしく候。もっともこれは或いは東京駅まで買いたる方、市内配達を頼むがよろしきかとも存じ候。

赤帽は荷物一個幾何との相場あり、大概五銭か十銭なり、まず一個十銭の算定にて渡さるれば宜しく候。列車給仕の心附は若い女の一人旅ではかえってなさぬ方よろし、電報でも発電方依頼せし場合は、其の時廿銭ほども遣わさるべく、寝台の用意以外に私用を命じたる時は五十銭ほ